

名古屋都市センター研究成果

平成23年度の研究の概要をご紹介します。
なお、研究報告書は名古屋都市センターのまちづくりライブラリーで、
概要版はホームページでご覧いただけます。

<http://www.nui.or.jp>

一般研究

研究
テーマ

中川運河のポテンシャル発信 ～運河魅力の共有のために～

元名古屋都市センター 調査課 音堅清人

1. はじめに

中川運河は、物流形態の変化により水運利用が低下し、水面利用が少ない状況で、名古屋市の貴重な水辺空間にもかかわらず、市民には遠い存在となっている。本調査では、中川運河全体のまち歩きを通して運河の魅力資源を見つけ紹介するとともに、取り組みを通して感知された運河のポテンシャルの活用について提案を行った。

2. 中川運河の魅力資源

(1) 水景

広大な水辺の風景が中川運河の最大の魅力であり、魅力的な水辺の風景として長良橋界限、小栗橋界限、猿子橋界限、堀止船だまり、小碓運河、港北運河、中川口緑地、中川口船だまりがある。特に長良橋から観る風景は、背後に名古屋駅の高層ビルが見え都心を感じることができ、運河幅が90mと広大な水面は中川運河でも一番の広がりを感じる場所である。



(2) 歴史的資産

名古屋の近代化と産業の発展を支えてきた歴史的資産として、松重閘門、中川口閘門、昭和の面影を残す倉庫群がある。松重閘門は、ヨーロッパ城郭風のデザインで名古屋市指定文化財として名古屋を代表する近代化遺産として保存されている。

(3) 水面利用

中川口には名古屋港漕艇センターがあり、ボートの練習やボート教室が行われ、名古屋レガッタの会場となるなど水上スポーツの拠点となっている。地下鉄の駅からも比較的近く、まちなかでボート練習等ができるのは大きな魅力である。



3. ポテンシャル活用のあり方

中川運河周辺のまち歩きなどを通して感知された運河ポテンシャルの活用について以下の提案を行った。

(1) 視点場の整備

橋からの眺めを満喫できるような視点場の整備を行う。

(2) 歴史的資産の保存・活用

古い倉庫を創造の場や市民憩いの場としての活用や中川口閘門を社会学習の場として閘門通過体験の実施を行う。

(3) 水面利用の促進

水辺を体験できる水上イベントの開催や観光拠点を結んだ観光舟運の就航を行う。

(4) 都市環境軸の形成

市民の憩いの場所とし花の名所となるような整備を行う。





まちの“界限”分析 ～那古野地区に焦点を当てて～

名古屋都市センター調査課 研究員 岩田悠佑

1. 調査研究の概要

「歴史まちづくり」の一助となるべく、「歴史的界限」について調査研究を行った。対象地区として取り上げるのは、名古屋市西部に位置する那古野地区である。

※調査地区の概要(2010年11月時点)
現在の那古野学区の人口:3,854人、世帯数:2,009、
1世帯あたり人員:1.84人、人口密度:12,890人/km²

2. アンケート調査

アンケートによって、地域資源に対する重要度や好きな場所などについて調査を行った。(回収率41.34%)

(1).好きな場所の集積としての“界限”

重要度の高いものとしては、この地区ならではのものが多いことがわかった。

項目	評価値
商店街の存在	3.34
樹木や身近な緑	3.16
蔵や古い木造家屋	3.15

(2).好きな場所の集積としての“界限”

アンケートに記述された「好きな場所」を集積したところ、以下の3つの集合があることがわかった。本研究では、既往研究等を参照することにより、これらの集合を“界限”と位置づけた。

①.四間道界限

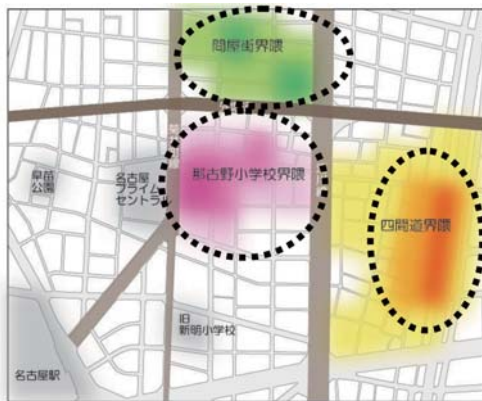
近年整備された道路の舗装や蔵の外壁、古い町屋の並びや趣のある路地や植栽などが統一感を演出している。

②.那古野小学校界限

小学校の周辺には幼稚園や消防署などの公共・公益施設が集積しており、一体性が確認された。

③.問屋街界限

北部の問屋街周辺は、同様の業態が集積し独特の雰囲気が醸し出されている。



3. まとめ

(1) “界限”と道

“界限”の形成にあたり、広幅員街路が“界限”を区分する一方で、細街路は“界限”性を強めることがわかった。

(2) “界限”とまちづくり

“界限”を構成する地域資源のあり方として、地域における日常生活と親和性の高い空間を形成するという視点が重要である。

したがって、地域における原風景を継承するには、地域の歴史や地域活動の継続を支援するという視点が重要であり、住民の参加による地元発意型のまちづくりが大切である。



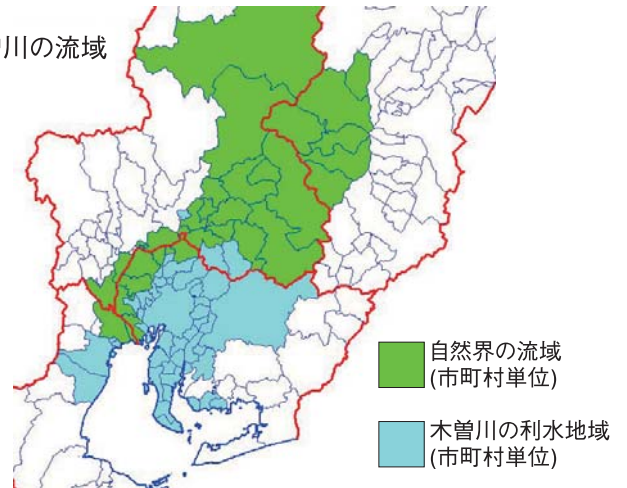
木曽川流域の恩恵の定量分析 ～森林からの恩恵に焦点をあてて～

名古屋都市センター調査課 研究主査 鈴木宏文

この研究では、木曽川本流と主な支流(王滝川、飛騨川)が流れる市町村を「木曽川流域」と定義し、流域の恩恵の定量分析を行った。

森林に着目してその多面的な機能を整理し、木曽川流域における森林からの恩恵を限定的な項目について大まかな条件設定をし、貨幣タムでわかりやすく定量化した。

■木曽川の流域



その結果、木曽川流域の森林からの恩恵を金額で表わすと、1年間で1兆6千億円であることがわかり、「広義の流域」の人口一人当たりでは20万6千円であった。このように金額で表わすことにより、下流地域の人々が上流地域から受けている有形・無形の恩恵を具体的に実感できるようになる。

また植林による1年間の費用対効果は最低でも3.2倍であり、間伐による10年間の費用対効果は5倍であった。

良好な水循環、二酸化炭素の吸収など森林からの恩恵を流域は享受している。こうした恩恵に対して流域にある市町村は何をすべきかという大きな課題に直面し、この課題への対応の1つとして「流域交流」が極めて重要な役割を果たすと考えている。

■木曽川流域からの恩恵(森林の公益的機能の評価額)

機能の種類	木曽川流域		
	評価額(/年)	構成比率	全国比
地球環境保全機能			
二酸化炭素吸収機能	395億円	2.5%	3.19%
化石燃料代替効果	46億円	0.3%	2.03%
小計	441億円	2.7%	3.01%
土砂災害防止機能/ 土壌保全機能			
表面浸食防止機能	6,209億円	38.7%	2.20%
表層崩壊防止機能	1,855億円	11.6%	2.20%
小計	8,064億円	50.3%	2.20%
水資源貯留機能			
洪水防止機能	1,717億円	10.7%	2.65%
水資源貯留機能	1,922億円	12.0%	2.20%
水質浄化機能	3,895億円	24.3%	2.66%
小計	7,534億円	47.0%	2.52%
合計	16,039億円	100.0%	2.36%
森林面積(千ha)			
	木曽川流域	全 国	全国比
	552.5	25,146	2.20%